

■ 書 評



十代の自殺の危険—臨床家
のためのスクリーニング、評
価、予防のガイド—

シェリル・A・キング, 他
原著
高橋祥友 監訳
高橋 晶, 今村芳博, 鈴木友
良 訳
金剛出版
2016年1月 250頁
本体価格 2,800円+税

本書は2013年に米国で出版された Teen Suicide Risk: A Practitioner Guide to Screening, Assessment, and Management (Guilford Press) という書籍の邦訳である。Teen は正確には「-teen」が年齢の後半につく、13~19歳までを指すが、米国で Teenager という言葉が生まれた背景に、世界大戦前後に10代の若者たちの反抗的社会活動が問題となった経緯があり、その多感な世代を指す言葉として定着したとのことである。本書で主題となっている10代後半の死因の第1位は自殺であり、この世代は社会的状況に影響を受け易く、周囲とのかかわりの中で様々な反応が出やすい年代でもあり、自殺による死は家族や友人、学校や地域に大きな悲しみをもたらすなど、その影響は小さくない。

米国における出版元の Guilford Press は教育や心理、精神医学の分野で実用的なハンドブックを出版しており、その中で本書は10代の自殺予防のガイドブックであるが、わが国でも参考にすべき点は多いと思われる。自殺の原因を調べたわが国の検討においては10代の自殺では精神的な問題、家族の問題と並んで、学校もその原因となっており、若者の自死をどのように予防するかは、国や地域を問わず、人類の大きな課題である。他の世代と比べ、10代においては周囲の環境としての社会は学校や家族が中心であり、本人への影響は大きく、そのことは自殺の実態や予防にも深くかかわる。

本書は題名に示すように自殺の危険とスクリーニング、そして評価や介入に重点を置いた内容になっているが、自殺予防に関して「自殺の保護因子」が紹介されている(58~60ページ)。その中で、他者との絆、特に家族や同世代の仲間からのサポートが自殺予防

に有効であること、さらにはこうしたサポートが心理的健康や幸福感に関係することから精神疾患を予防し、適応力や青少年の競争力を増すというエビデンスもあると述べている。そして、『臨床家として、自殺の危険の高い青少年に対する危機対応と治療計画を立てる際には、これらの点を念頭に置く必要がある。自殺の危険の高い青少年の家庭、学校、地域におけるサポートの絆を強めるとともに、彼らの問題解決能力を改善するように働きかけていく必要がある。』とまとめられている。社会学者のデュルケームは自殺を回避するためには「社会集団を十分強固にして、個人をもっとしっかりと掌握できるようにするとともに、個人自身も集団にむすびつくようにさせること以外に方法はない。」(『自殺論』宮島喬訳、中公文庫)と記述しているが、本書が対象とする10代の若者の自殺を防ぐためにもそのような方向性が求められることが実感された。また、その世代の若者は社会(周囲の環境)により影響を受けやすいが、そのことは逆に、良いかかわり(絆)が自殺を防ぐ上でより有効になる可能性を示唆しているようにも思える。

本書には10代の自殺に関する様々な課題やエビデンスが表やコラムによってまとめられているほか、法的問題など臨床家が留意すべき内容も取り上げられている。付録として自殺リスクを把握するための様々なツールや関連するウェブサイトなど実用的な情報が含まれている。その一例として、付録Aの『青少年の自殺行動と自殺の危険因子チェックリスト』では具体的な内容(例:女性-非致死性的自殺行動、複数回の自殺未遂-最高の自殺リスク)が簡潔にまとめられている点が印象的であったが、この付録Aでは人種背景-黒人女子の自殺率が最低、アメリカ先住民とアラスカ先住民の男子の自殺が最高、致死的な手段の手に入りやすさ(銃)など、米国の状況が反映されている面もあり、わが国の実情に沿った改訂がなされると、より活用に供すると考えられた。

以上、本書は医療関係者や行政関係者など精神保健専門家のみならず、学校関係者や子どもを持つ親世代の方々など多くの方に勧められる内容である。自殺予防に関する報道が自殺を防ぐ可能性を高めることをパパゲーノ効果と呼ぶが、本書のような10代の自殺リスクや自殺予防に関する提案が広く知られること自体が次世代を担う若者の自殺予防に繋がるのではないかとも思われる。

(谷井久志)